

子育ての支援は手厚くなるが、さて！

あがの 順

財布には小銭が500円。

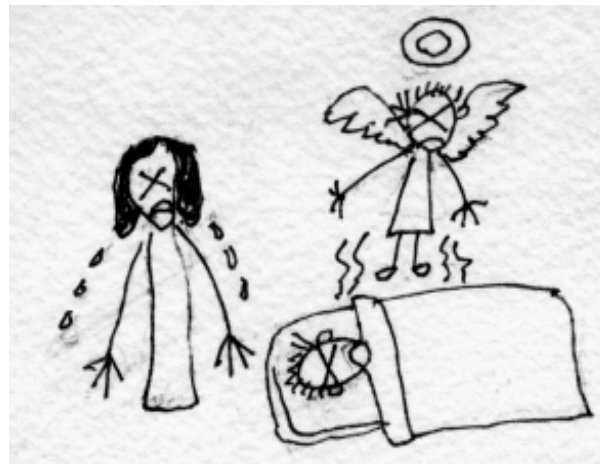
生活に困窮した宇都宮市の無職の女性(29才)の長女(2才)は自宅で衰弱し、凍死した。この痛ましい出来事は各新聞で報じられた。この女性はデパートの店員をしていたが、出産のため退職し、その後は無職だった。内縁の夫は出産前に失踪し、8畳一間の生活も預金を取り崩したり、保険の解約やらで、やりくりをしていたが、それも限界で、月数万円の郵便の宛名書きの内職をしたものの、その仕事も途切れ、仕事を探しても見つからなかった。料金支払いが滞って、ガス、水道の供給が止まり、炊飯も出来ず暖房も使えなかった。最後の数週間は「何も考える事が出来ず、小さくなっていく子供のお腹を見ていた」と話していた。

この問題の起きた原因の根底には、「生活保護」と「児童手当」がある。それが無知なためか、機能しなかったのだ。彼女は「生活保護」の制度があることは知っていたが、自分が受けられるとは思わなかったと話している。つけ加えれば、内縁の逃げた男などは親になる資格も人間である資格も無い。

互恵の心をなくした日本人

以上のように幼児を餓死させるという事を考えると、その背景には根深い問題が孕んでいる事がわかる。つまり、我が国では都市化や核家族化などの社会変動が急激に進み、その結果この国では親族や地域の共同体による生活を支援する仕組みが、いまやほとんど崩れてしまっているのだ。

かつて私は二度にわたりインドを旅した事がある。インドは大国だが、国民には非常に貧しい人達が多い。そこにアジアモンスーンが襲い、バングラディッシュに近い地域は洪水で水浸しになった。その時、イン



ドの人達は自分の仕事を投げ捨て、被災者の救済に取り組んでいた。そこで私は「自然災害の救済に何故多くの皆さんが積極的に取り組むのか、政府は何もしてくれないのか」と訊ねた。すると彼らは「自然災害などの救済は、国がやるよりも我々がやった方がうまく行くのだ」と答えてくれた。これが互恵の心なのだ。日本人の心から消え、崩れ去った互恵の心がまだインドの人達には残っていた。

次の文書は朝日新聞の社説で紹介されていた長谷川寿一さんの『『奇妙なサル』にみる互恵性』の一文だが、「600万年前にチンパンジーの祖先と分れた人類が繁栄を成し遂げられたのは、進化の過程で言語を獲得したことと、世代間に情報を伝達する文化を花開かせたのは、人が持つ持続的な互恵性や、相互の信頼、共感といった感情だった」と。

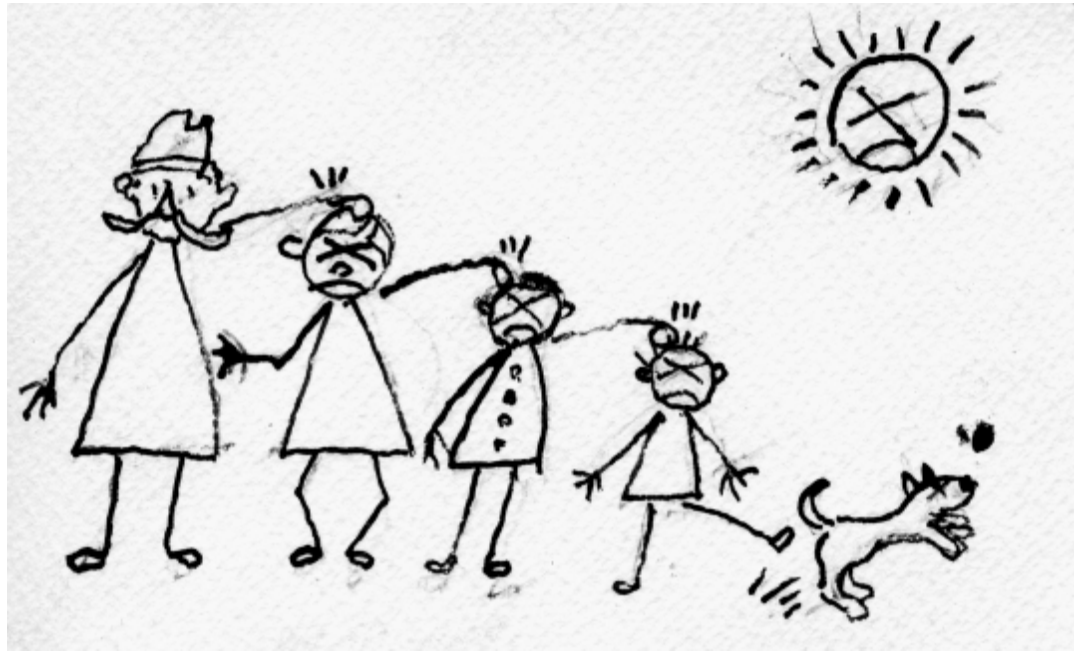
社説は、多くの人々が吸い寄せられる現代の風景は、支え合う「心の絆」の寒々と

した状況を映している、と書く。

かつて日本にも縦横の絆によって支えられていた時代があった。その江戸時代は階級社会が存在したにもかかわらず270年も続いたというのは、武士階級による百姓、町人、商人などの市民に対する圧力や規制が少なかったためと言われている。

それでは互恵の心や絆が崩れ去ったのは何時の事だろう。アメリカのペルー提督が浦賀に軍艦を近づけ、開港を迫った。時の江戸幕府は慌てふためき植民地化される事を恐れ、幕藩体制まで犠牲にして富国強兵の日本を作るため、大政奉還までして明治政府を作った。そのことにより上意下達という上からの圧力、規制が強まり、国民皆兵や義務教育が押し付けられた。その体制の功罪はあるにせよ、富国強兵を願うあまりに階級制を取り入れ、規律に縛り世の中全体の組成まで変えてしまった。昭和の時代は戦争の時代でもあり、階級制はまかり通り市民は耐える以外になかった。そし





て、その重圧が敗戦という形で与えられることになった。かつての強圧の反動というか、人々は自由を謳歌し過去を捨てるために、日本人の精神文化まで捨て去ってしまった。確かに縦横の絆というのは重く煩わしい。しかし、それが全く姿を消すというのは、背筋が寒くなる思いがする。

孤立無援の育児ママ

かつて日本には娘のお産は、里帰りし母親の元で出産する習わしがあった。そして、十分に体力が回復してから、夫の元に帰ったものだ。だが、都会生活者の人々には、出産に帰る親元もない人達が多い。つまり、出産、育児、家事も核家族となれば孤立無援の状態に置かれる。

煩わしい絆を嫌い、核家族化した日本の都市社会は、絆を捨てて核家族化を選んだのだからやむをえない。

出産には疲れに加えて、体形やホルモンのバランスが変化する中で精神的にも不安定になりがちとされる。特に両親と子供だけの核家族では、父親が仕事に出る日中、産まれたばかりの赤ちゃんを抱えた母親は孤立無援となる。

そこで、今こそ国の出番だと名乗りを上げたのが厚生省。厚生省は来年度から育児や家事を手伝うヘルパーを低料金で派遣する事業に乗り出す。対象は日中に育児支援が得られない、いわゆる核家族の母親。祖父母と同居など、身近に支援が得られる場合は対象外となる。期間は出産から1ヵ月程度で、双子や三つ子などの場合はさらに手厚い支援を検討している。これも少子化対策のためらしい。

厚生省では出産から1ヵ月までの母親の元に、10日間ヘルパーを派遣し、1回当たり4時間となる見込みだが、費用は1回3000円程度。所得税を払っている家庭は全額自己負担。所得税免除の家庭は1回

5000円。地方税免除の家庭は無料。ヘルパーは買い物、掃除、洗濯、食事、おむつの交換から日頃の悩みを聞くなど子育て全般の支援にあたる。

児童手当も良いが負の遺産どうする

一方、児童手当という制度がある。これは国が子供を抱える家庭の経済的負担を和らげるために現金を支払う制度。現在は子供が3才になるまでの間、第1子、第2子で月5000円、第3子以降は月10000円を支給している。この制度には所得制限があり、夫婦と子供3人の家庭の場合、自営業なら年収480万円未満、サラリーマンなら年収513万円未満の世帯が対象。与党3党は昨年、支給額や所得制限を据え置いたままで対象年齢を未就学児童まで広げることに合意している。

今回の措置で対象となる子供の数は26

0万人から570万人に増える。

与党3党は2001年度予算編成に向けて、扶養控除の抜本的な見直しと児童手当の拡充を検討するとしている。これも少子化対策を強化する観点から。

さてそこで、私はかつて「何故人間は間違いを繰り返すのか」という一文を書いた事がある。それは、人類の救済を考えて、措置を取った事が逆に人類を不幸にする結果を招くというものだった。まもなく世界の人口は100億人に及ぶといわれている。食料不足、水不足、石油の枯渇、大気汚染など、負の遺産となるものが目白押しにある。中国、インドなどは産児制限を強化している中、日本だけが少子化で国力が弱まるという目先の現象にのみ反応して、出産奨励の旗を振るばかりで良いのだろうか。世界の国や人類が、負の遺産を背負う形で将来を考えないと、人類そのものの破滅が現実のものになりかねない。

